

家庭の食事からみるウイグル族のつきあい ——中央アジア新疆カシュガルにおける事例から——

熊谷 瑞恵*

I はじめに

1. 食べることをめぐるつきあい

ものを食べる時、そこにはさまざまな他者との関わりがある。家庭は食べる人間をどのように食卓に集めているのか。家庭での食事中に他者があらわれた場合、食事は他者とのあいだでも共有されるべきなのか、そうではないのか。そのやりとりの過程からは、食事をとおした個人や集団のありかたというものを見いだすことができる。本研究は、ウイグル族の家庭における食べかたのプロセスを考察し、人と食べ物とのあいだに形成される人間関係の秩序を描き出すことを目的とする。

中国新疆のウイグル族は、ムギを主要な穀物食品とする食文化圏の東端に位置する民族のひとつである〔石毛・吉田・赤阪・佐々木 1972: 56〕。ウイグル族の食事は、これまで、かれらの主要なムギ食品「ナン」とウイグル語の“食べる”という語との関連、そして「ナン」の配膳方法にみられるコメ食文化との違いが述べられてきた〔熊谷 2004〕。ウイグル族のあいだで「ナン」を食べることは“食事”を“食べた”とはみなされない。「ナン」を食べることはウイグル語で“茶”を“飲む”と言われ、ウイグル語の“食事”「タマック (tamaq)」とは異なるものとして扱われるのである。それを食べることがウイグル語の“食事”とみなされない「ナン」は“茶”「チャイ (chay)」として日に6回～7回という回数でとられ、1日に0回から1回という頻度で見られる「タマック」とともに、1日の食事行為を構成する。この6～7回の「チャイ」と、0回から1回の「タマック」は、朝食、昼食というように一度にまとまった量をとる食事とは異なる枠組みを構成しているといえる。

この食事の場の特徴は、いつでも食卓に置かれているナンを中心とした食べかたにより、いついかなる時間においても食べる人をむかえるという点である。その食卓は、規定された食事時間による成員の束縛をせず、食べることに對し開かれた食卓である。この食事の場がどのようなかたちで成員を食卓に集め、その機会をどのように決定しているのか、そしてそうした場の共有がどのような言葉によって規定され、その結果、どのような人のつながりを産みだす場となっているのか。本研究は、このような食事の場がつくりだす、ウイグル族の家庭のうみだすつながりを考察していくことを目的とする。

2. 家庭の食事研究

家庭の食事に対する研究は、これまで多くが家政学の立場からなされてきた。それらのほとんどは食材の内容とその摂取量に注目している〔一番ヶ瀬・江澤・田端 2002〕。そこでは国家の定めた栄養基準を満たす理想的な食事という考えかたがあり、分析の焦点は理想的な食事と、現実の生活とのあいだに見られるずれという点にあてられてきた。そのため、調査は食材のバリエーションと量に注目した、質問表を用意した聞き取り、あるいはアンケート表の回収によって行なわれ、家庭

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
日本学術振興会特別研究員

において直接観察がおこなわれるということはほとんどなかった¹⁾。

食事を文化として記述する研究においても、食べる行為それ自体に関心が寄せられたことはあまりない。小松はカメルーンの家庭における食材の組み合わせのパターンに注目し、直接観察による調査をおこなっているが、分析の対象とされたのはアンケート回収という間接的方法によってとられた数量的データだけであった [小松 1996]。松原はトルコ家庭の食卓に見られる食材、マナーと調理器具に対する記述と、食材の組み合わせパターンに関する分析を行なっているが、そうした組み合わせから、その生活における意味づけを明らかにしてはいない [松原 1977]²⁾。柳本によるチベット・シェルパ族の食事に対する記述は、食材の内容、その調理の方法を記述するのみである [柳本 1971]³⁾。以上の研究では食材とその組み合わせに焦点があてられていたといえる。それらと異なる視点で行なわれたアリソン、コウニハンは食べかたよりも、政治的な影響が家庭におよぼす影響という点に注目しており、そこでは人の食べかたよりも、人々の考えかたに焦点があてられている [Allison 1997; Counihan 1997]⁴⁾。

総じて家庭の食に対する研究は、多くが何を食べるか、という点に関心がはらわれ、食べ物と人を結びつける、食べるという行為そのものにはあまり注目してこなかった。家庭で具体的な食べかたを直接観察した研究がすくなかった理由として、石毛・井上・柴田・杉田、そして松原は、家庭の食事という対象の日常に密着していることによる観察者の関心の薄さ、またプライバシーや被調査者のかまへの問題などによる、家庭という場所の継続した直接観察の難しさを指摘している [石毛・井上・柴田・杉田 1995: 237; 松原 1977: 169]。しかし、食べるという行為を考察する場合、家庭という場は、日々繰り返される、もっとも身近で基本的な食事パターンを示す場所としてあると本研究は考える。

食べかたが考察されてこなかった家庭の食事研究に対する反省から、分析ポイントの抽出をおこない、食べかたから人間関係を見る、という試みを行なった研究に、石毛・井上による『現代日本における家庭と食卓——銘々膳からちゃぶ台へ——』があった [石毛・井上 1991]。石毛・井上によるこの研究の内容は、副題ともなっている「銘々膳からちゃぶ台へ」という過去における食卓の変換期の情景を解明することであった。70才以上の女性 284名に対する聞き取りから成るその調査は、座の位置や料理の盛りかた、箸をつける順番という食べかたを通じて家族をみる、という視点をもっていた点において従来の研究と異なっていた。

本研究は、ウイグル族家庭において、食べるという行為が作り出す人々のつながり考察する。そして、そのつながりが、どのような人々を含み、その結果、家庭の食卓という場所をどのような場所として意味づけているのかを描き出す。調査は、ウルムチにおける研究 [熊谷 2004] に引き続き、石毛・井上の調査項目を参考に分析をおこなう [井上 1991: 58]。本論では特に「朝・昼・晩に何

1) [梅本・難波 1970; 馬場・深蔵 1975; 1976; 奥田 1986; 青山 1998; 藤田 2001] など。

2) 松原の記述には頻りに食卓にあらわれる食材や、朝と夕とで出現時間帯のことなる食材が見られるが、食材の名称を記録するにとどまり、これらを現地の人々がどのように意味づけ使い分けているかについては記述がない。

3) 柳本では調理の手順に対する分析がおこなわれているが、「炒める」「煮る」といった行程が日本語を用いて判別されている点、そして、「1日2食」という記述と「空腹になったら各人適当な時間に食べる」という、内容の一致しない表記がなされている点が指摘できる。これには、調査が長期の住みこみ調査ではなかったこと、通訳を介した聞き取り調査であったことなどが理由として考えられる。

4) アリソンは日本における、幼稚園児に対する母親の弁当づくりを論じている。そこでは日本の“学歴社会”や政府によるカリキュラムなどの影響からみる弁当という、社会的な影響力からみた点に焦点があてられている。分析の対象となっているのは日本で子育てをするアリソン自身と学校教師との会話であり、実際の家庭において手順を見るということは必要とされていなかった。コウニハンによる論は、第2次大戦とイタリアの経済政策の変化期における、パンの生産と消費に対する考えかたの変化を論じている。ここで分析の対象となっているのは、経済発展にともない農村の人々のパン焼きに対する考えかたの推移であり、行為のしかたは対象とされていなかった。

を食べていたのか」という項目にみられる食事時間のありかたと「在宅者の人数と、食事をそろってとった人数」という項目にみられる場の共有状況に注目し、分析をおこなった。これら項目に注目した理由は、好きな時間に好きな量を食べることができるウイグル族の食卓において、場の共有が何人でもどのようにおこなわれたかということ进行分析していくにあたり有効であったからである。

本論は3つの分析から構成される。II. 1. ではウルムチでみられた「チャイ」「タマック」という食べかたが、カシュガルではどうみられたか、ウルムチで見られなかった特徴があるとしたら、それは「チャイ」「タマック」のあいだにどのように位置づけられるのかを検証する。II. 2. ではII. 1. で確認された食事の場において、人々がどのような意味づけによって場の共有をおこなっているのかを分析する。II. 3. ではそうした場の共有が、結果的に家庭の食卓をどのような場としているのかを来客状況の長期観察の結果から考察し、食卓という場になう役割としてまとめる。

3. 調査地カシュガル：紀元前からのオアシス都市

本調査は、中華人民共和国新疆ウイグル自治区、カシュガルにて調査をおこなった(図1)。本節では、カシュガルという地域の概略を述べていく。

新疆ウイグル自治区は、タクラマカン砂漠と北の草原地帯とその間をささぎる天山山脈によって構成されている。人口は約1930万人、ウイグル族がその46%にあたる882万人を占めている[新疆维吾尔自治区统计局(編)2004]。ウイグル族以外に40%を漢民族、7%をカザフ族、4%を回族が占めている。新疆には13の民族が住むとされているが、1950年代からの急速な移住によって増加した漢民族を除けば[小島1998]、新疆の民族はほとんどがウイグル族であり、少数がカザフ族・回族であったといえる。その分布は北部草原地帯に住まう牧畜民カザフ族と、南部オアシス地帯に住まう農耕民ウイグル族とで、比較的はっきりとした住みわけ状態にある。本研究の調査地であるカシュガルは、南部オアシスの西端に位置し、ウイグル族の集住する地域のひとつである。

カシュガルについての最も古い記述は、紀元前『漢書』西域伝のイラン系オアシス都市国家“疏勒国”であるとされている。現在みられるカシュガルの街区が形成されたのは、16世紀カシュガル・ハーン国の時代である。その後成立したカシュガル・ホジャ政権が清朝によって滅ぼされ、1760年代にカシュガルは清朝の一部となる。当時の記述によれば、カシュガルは戸数2545戸、人口8745人、市壁が周囲を2kmにわたってかこみ、内部はいりくんだ街路と密集した家屋をそなえたイスラーム地域に特徴的な外観をそなえた街であったという。征服後、清朝は直接的な支配を避け、ムスリムの伝統的な都市と生活方法の持続を容認してきたため、清朝による新疆省の成立以降もカシュガルはウイグル・ムスリムの生活する都市として維持、発展してきた[真田1992: 551-552]。

カシュガルは、パキスタン、クルグズスタンの国境と近接した地域にあり、現在では、バスに乗れば1日で国境を越えることができる。この近さが、歴史的にもカシュガルを新疆の中で最も早く西方イスラーム文化に触れる地域としてきた。最も早くイスラームに改宗したとされるウイグル人、サトゥク・ボグラー・ハーン(sutuq-bughra xan)⁵⁾の廟がカシュガル東部アトシュ市にあることを含め、カシュガルはイスラームが新疆に広まった際の起点として知られる。また11世紀に書かれたトルコ語諸方言の編纂書『トルコ語辞典』の著者マフムード・アル・カシュガリーがカシュガルの出身とされていることなどから、カシュガルは「カシュガルに來なければ新疆に來たことにはならない」という言い回しがみられるほど、ウイグル社会の文化的・精神的な中核の地位を占めてきた。

カシュガルは、行政的にはカシュガル地区(漢語:喀什地区)として構成され、人口は約350万人、

5) カラ・ハーン朝初代ハンの孫(955年没)。伝説上の人物であるとの色彩も強いとされている。

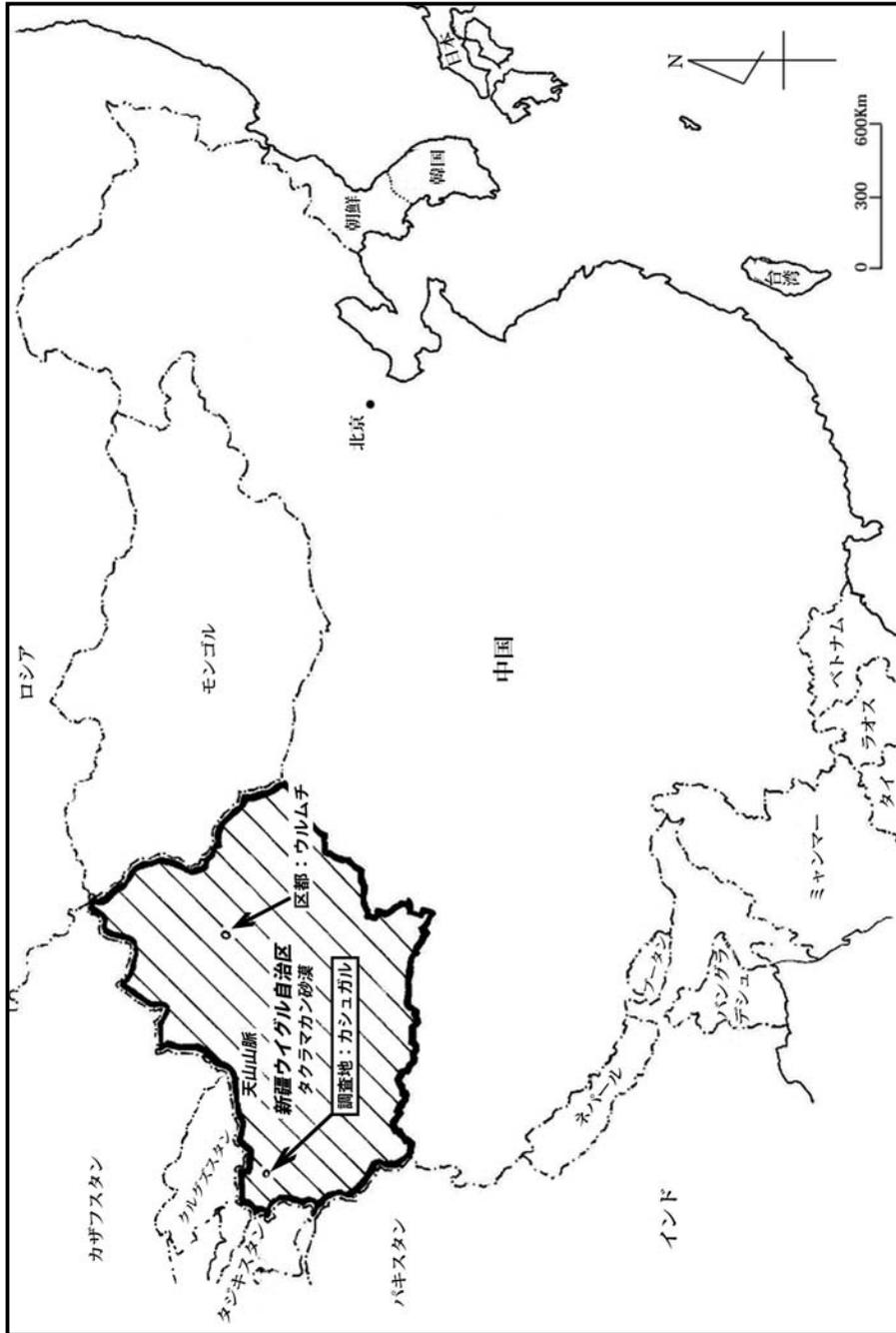


図1 新疆ウイグル自治区と調査地カシュガル

そのうちウイグル族が89%の310万人を占めている。総人口のうち76%は農業人口が占め、農業⁶⁾を中心的な生業とした地域であるといえる〔喀什地区行署办公室 2004b: 69〕。気候は中温帯大陸性気候に属する。年平均降水量は市内観測で63.8mm、年平均蒸発量は2487mmで、非常に乾

6) 農業生産は、統計ではムギが年間86万トン、トウモロコシが65万トンであり、この2種類がカシュガルにおける穀物生産の96%を占めている。その他野菜が61万トンの他、アンズが24万トン、ブドウが5万トン、ザクロが2万トン生産されており、ザクロはカシュガルの特産品として有名である〔喀什地区行署办公室・喀什地区统计局編 2003〕。

燥した地域である [新疆维吾尔自治区地方志编纂委员会 2002]。この乾燥はカシュガルの食事文化にも影響をもたらしている。

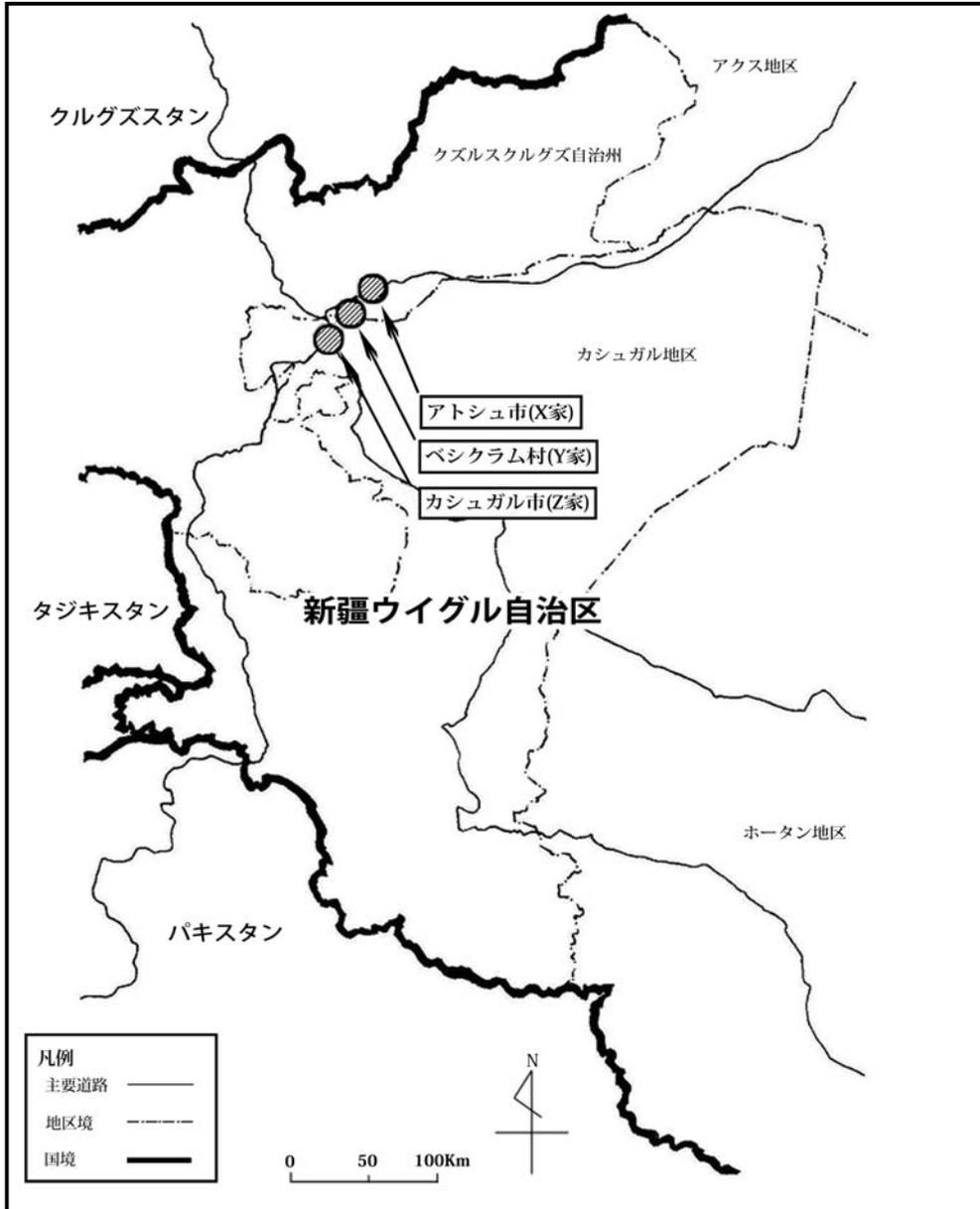


図2 カシュガル地区周辺における調査家庭の位置

カシュガル地区は1つの市と11の県により構成されている。本研究の調査地は、地区の中心として機能しているカシュガル市⁷⁾ (ウイグル語 / qeshqer、漢語 / 喀什) と疏附県に属するベシクラム郷⁸⁾ (ウイグル語 / beshkerem、漢語 / 伯什克然木、カシュガル市から北東約15km)、隣接す

7) 中国の国家から村落にいたる行政区の構成基準は、本論で言及する単位に限って述べると、1級行政区に自治区、2級行政区に地区、3級行政区に県及び市、4級行政区に郷となる。郷にあたる4級行政区が最小の単位で、これ以下には補助行政区としての組・寨・村が加えられる [田畑ほか 2001: 7]。

8) ベシクラム郷は新免康、真田安、王建新によって調査が行なわれた“ベシケリム”郷と同一の郷である [新免・

るクズルス・クルグズ自治州のアトシュ市（ウイグル語 / atush、漢語 / 阿图什、カシュガル市から北東約30km）の3地域の家庭である（図2）。本研究は、この地域において、商人家庭、農民家庭、国家に所属する公務員家庭という、生業の異なる3つの家庭をそれぞれ考察し、その共通性を探り出していくことで、この地域の暮らしにみられる特徴のひとつを描き出していく。

カシュガル市は行政上カシュガル地区と区分された地域の中心都市である。人口は35万1874人で、うち77%をウイグル族が占めている。ウイグル族以外に漢民族が22%を占めていて、その他の民族は1%である。このことは、新疆の他都市でも同様に見られる1950年以降急速に移住した漢民族の影響を示すと同時に、カシュガルが、もとはほとんどをウイグル族が占めていた地域であったことを示している。

ベシクラム郷はカシュガル地区の疏附県に属し、乗り合いタクシーでカシュガル市から15分ほどの北東約15Kmの距離にある。疏附県の人口は36万5783人で、うち98%がウイグル族である。ベシクラム村の人口は、『疏附県志』[1999]で2万9530人であり、その92%が農業人口である（疏附県地方志編纂委員会1999:70、喀什地区行署办公室2004b:69）。ベシクラムという名称にはペルシア語で天国を意味する *béhisht* と、果樹園を意味するアラビア語 *kerem*（※アラビア語でのつづりは *karm*）からなる *béhisht-kerem*、そしてトルコ語で5つを意味する *bash* と、地下住居の *geme*⁹⁾ とからなる *bash-geme* という2つの由来が伝えられ、古くからある村とされている [Muhemmetimin 2003]。

アトシュ市は、カシュガル市から北東30kmほどの場所にあり、カシュガル市とは数十分おきに発車する乗り合いバスで緊密に結ばれている。アトシュ市は、カシュガル地区と隣接する、クルグズ自治州というクルグズ族の名を冠した地域の中心的市街地であるが、その人口20万4932人のうち80%はウイグル族が占めており、12%をクルグズ族、8%を漢民族が占めるなど、隣のカシュガル市同様、ウイグル族が多数を占める土地となっている。クルグズ族は、ほとんどが市外に住み、自治州全体で見ても、クルグズ族人口は29%であり、64%をウイグル族人口が占める、ウイグル族の多い地域となっている。

4. 調査家庭：サラリーマン・商人・農民、そこからみる共通性

本節では調査家庭の概要を述べる。本研究では以下に述べる3つの調査家庭において、食事のとりかたに注目した住み込み調査をおこなった。この3家庭を便宜的にX家（アトシュ市：公務員家庭）、Y家（ベシクラム村：農民家庭）、Z家（カシュガル市：商人家庭）と呼び、論をすすめる。3家庭は、それぞれ親族関係にあり（図3）、出身地をベシクラム村としている点で共通している。本研究の調査家庭のうち、X家のあるアトシュ市は、行政的にはカシュガル地区に含まれていない。しかし、3家庭ともカシュガル地区ベシクラム村を出身地としているという点で、本論はカシュガルという地域においておこなった調査として位置づけられよう。本論は、職業と居住地域が異なるさまざまな家庭にみられる共通性に注目していくものである。

アトシュ市にあるX家は退職した公務員の夫婦とその子からなる世帯である。収入は両親が共

真田・王 2002]。新免らによるこの名称の読みは *bashkérém* という表記に沿ってされたものと考えられる。しかし筆者は、現地の人々が発していた音は“ベシケリム”であるよりも“ベシクラム”に近いと考えたため、本論の表記には“ベシクラム”を用いた。

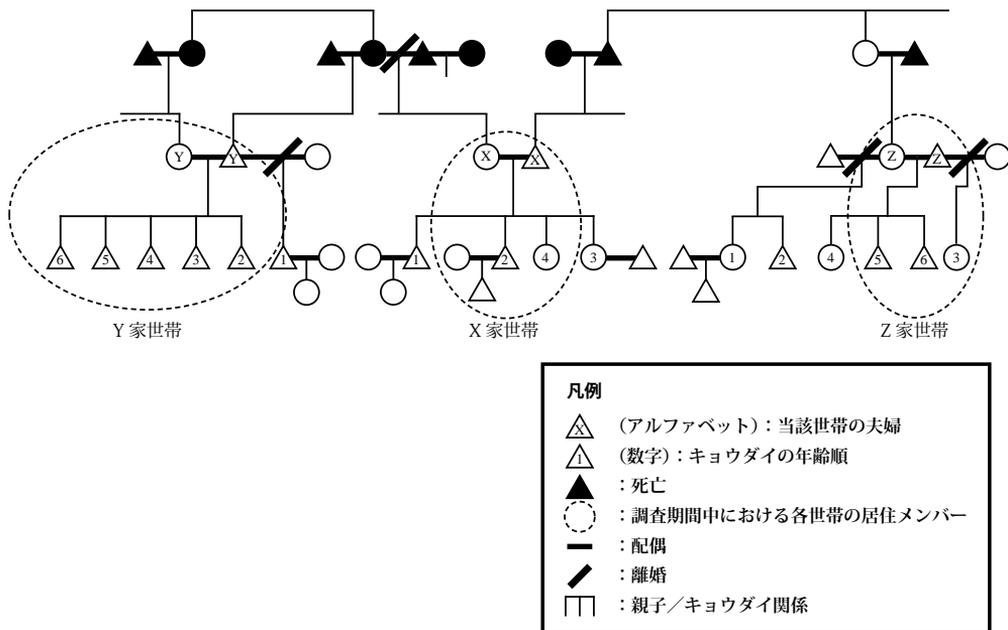
9) 聞き取りによれば（カシュガル調査家庭X家夫）、*geme* は地面を掘り、屋根を渡したのみの簡易住居のことを指すという。X家夫が地震の頻発することによって有名新疆マラルベシ市に住んでいた頃、よく家が倒壊したために現地では *geme* に住んでいた人もいた、とのことである。

にもらう合せて 1500 元前後の年金である。この額は調査地では一般的な収入額と見なしう¹⁰⁾。4 人の子のうち 2 人の息子は結婚しており、2 人の娘のうち 1 人は調査期間中に結婚した。結婚した子供達はそれぞれ家屋を別に持っているが、出張の多い次男の妻子はほとんど X 家に住んでいる。次女は区都ウルムチの大学の学生で、休みの間のみアトシュに帰省してきている。

Y 家はベシクラム村の農家である。Y 家は販売と自家消費のためのムギとブドウの栽培をし、30 頭ほどの羊を飼育している。その他、村での臨時的土木労働や事務作業もおこなっている。その収入は充分とは考えられていないようであり、X 家妻が弟宅である Y 家を訪れる際には、その生活を助ける為に布や食糧を買って持っていっていると語っていた。Y 家には 6 人の息子がおり、長男のみが結婚して住居を別にしている。職業は、夫妻が農業に専従し、長男が村の小学校教師、次男が村役場の農業指導官、3 男が壁塗り職人の見習いをしている。4 男以下は学生で、4 男が中学生、5 男と 6 男は小学生である。

Z 家はカシュガル市内の家庭である。Z 家の収入は 3 家庭の間では最も多いと思われる。それは、Z 家夫がウイグル民間薬の売買を手がけ、その収入によって過去 3 度のメッカへの巡礼を行なっているからである。そのうち 1 度は妻と自身の父親を伴ったものであり、Z 家夫婦は夫婦共にハッジ (haji・メッカ巡礼を行なった者) として、カシュガル内のハッジ達の間にも知己が多い。Z 家妻は特定の仕事にはついていない。Z 家の子供は 6 人おり、商人と結婚しアトシュに住まう長女、ウルムチで商売中の長男とウルムチで勉強中の 3 女、カシュガルにて家事手伝いの次女と、高校生の次男と中学生の 3 男がいる。このうち Z 家に調査当時住んでいたのは次女と学生である次男と 3 男との 3 人である。

図3 調査家庭における親族関係と居住メンバーの概要



10) 『喀什統計年鑑』によれば、カシュガル地区における都市居住者が消費する金額の水準はひとりあたり 4260 元 (カシュガル地区 4260 元、カシュガル市 4015 元、疏附県 2237 元、農村地区ではカシュガル地区内平均で 1077 元) となっている [喀什地区行署办公室 2004a: 25]。これは筆者の周辺ではあまり現実的な数値ではないように思われた。X 家長女が公共機関に勤務し給料は 1200 元前後、食堂などのウェイターは 300 元から 600 元得ていると聞いていたからである。人々が稼ぎのいい人について話をする場合には、3000 元あれば「3000 元ももらっているんだって!」という話しかたをする。このため、筆者は本稿において統計年鑑の額にかかわらず X 家の収入が一般的というように位置づけたい。

5. 調査方法

本研究の調査期間は2004年6月～2004年10月、2004年12月～2005年9月の約13ヶ月である。その全ての期間を調査家庭のいずれかですごし調査をおこなった。調査方法は参与観察と聞き取りである。調査言語はウイグル語で、状況に応じて漢語も使用した。また、本研究において調査者がウイグル族とみなした人々は、中国政府による民族の識別調査によってウイグル族との認定をされている人々である。この識別による結果は、中国においては漢民族を含め、身分証にはつきりと記載されている。

現在新疆において用いられるウイグル語の文字はアラビア文字であるが、本論におけるウイグル語の表記は、新疆においても幅広く利用されているアルファベットを用いたコンピューター上でのウイグル文字表記法(UKY)を用いた。なお、本論におけるウイグル語のスペルは、料理名に関してはAbudukérim [1996]、それ以外に関してはEkber [1999]に基づいて記述をおこなった¹¹⁾。会話に関しては状況の再現という点を重視し、現場で収集したものをそのまま記載した。そのため文法的な表記の正確さを追求したものではないことを注記しておく。

6. ウイグル料理のバリエーション

本節ではウイグル料理の概要を述べ、後に実際の食生活をみていく時の手がかりとする。

ウイグル族の家庭の食事はナンをもって始まる。ナンは「ウイグル族の間で長い歴史を持ち、日々の食事の根幹をなす基礎的で伝統的な食べ物である。まず、ナンなくして、ウイグル族の日々の生活は到底なしえない」 [Abudukérim 1996: 31]。ナンは小麦粉生地を自然醗酵させ、竪穴のかまどであるトヌール(tunur)で焼いたものである。ナンの調達には妻達の仕事である。カシュガルの調査家庭では、農村にあるY家ではすべてを家庭で焼き、X家、Z家では外部で購入、あるいはムギをナン屋に持っていき焼いてもらったりしていた。カシュガルの家庭で焼かれるナンは厚み5mm、直径30cmほどの大きく薄いものが多い。

ナンの他にも、いくつかの小麦粉加工食品が見られる。コイマック(quymaq)は、生地を醗酵させて揚げた揚げパンである。サンザ(sangza)は小麦粉生地を面状に延ばし揚げた揚げ菓子である。サンザは回族から伝わったものであり、もとは饊子(漢語/sǎnzi)と呼ばれていたものである [顔其香(編)2001]。バカリ(baqali / 語源はペルシア語)は、パウンドケーキである。ピチネ(pichine / 語源ロシア語)はクッキーである。これら、バカリ、ピチネなどは、語尾にバカリ=ナン、ピチネ=ナンとつけて呼ばれることがあり、このことは、ナンという単語がこれらの小麦粉加工食品を包括した概念として用いられるものとなっていることを示している。

こうしたナン・小麦粉加工食品とともにとられるのが、茶(チャイ/chay)などの飲み物類である。この飲み物には、茶の他、ヨーグルト(ケティック/qétiq)、ハルワ(halwa / 語源はアラビア語)などがある。ハルワは熱した羊の脂肪に小麦粉と砂糖水を混ぜて練ったものである。この他、スイカ、メロン、ブドウといった汁気が多い果物類もナンを食べる際の水分として食される。そして温かく料理されたワンタンスープ(チュチュレ/chöchüre)、汁ソバ(ウギユレ/ügre)、米粥(ショウグルチ/showigürüch)、ほうとう(スユカシ/suyuqash)、などの料理もナンとの組み合わせによって食される。なお、ほうとうを意味する“スユカシ”はウルムチのレストランのメニューなどではほうとうスープを指すとされているが、本来は“水っぽい料理”という意味のスユック=アシ

11) 料理のひとつである“ラゲメン”のスペルに関しては人、店、本によって様々なつづりが用いられているため、本論では調査家庭の人物とともに書き出したものを記載した。

(suyuq=ash)であり、チュチュレ、ウギユレ、ほうとうを含む汁物料理の上位概念として存在している。

ウイグル語では、ナンを食べ、茶を飲むことを「茶」を「飲む」とし、同時にワントンスープ、汁ソバ、ほうとう、粥は、ナンを浸して食べられるために「飲む」ものであり、料理であっても同時に「飲む」ものとして、「食事(タマック)」を「食べる」こととは区別されている [熊谷 2004: 12]。

この他、ナンをともなわずに食される「食べる」料理にポロ、ラグメンがある。ポロ (polu) は米と人参、羊肉との炊き込みご飯である。ラグメン (raghmen) はゆでうどんに炒めた肉と野菜をかけたものである。これらの料理はスユック=アシに対しウイグル語でコユック=アシ (qoyuq=ash / 濃い料理) と呼ばれる。これらの料理に汁気はなく、これを食べる時に、浸して食べるナンは食卓にはあられない。

このように、ウイグル料理の食べかたは、ナンとの組み合わせでナンを浸して食べる「飲む」「チャイ」か、単独で食される「食べる」ものかのどちらかであるといえる¹²⁾。こうしたスユック=アシからコユック=アシまで、ウイグル族の料理はひとつの火元、ひとつの鍋で調理される。一度に複数の料理を組み合わせる料理が食されることはまれである。

II 家庭における調査と分析

1. ナンをめぐる食事の単位

カシュガルにおいて、家庭における日常の食事の配膳はどのようにおこなわれているのか。以下にウルムチとの対比をふまえ、その様子を見ていく。特に“茶”を“飲む”“チャイ”、“食事”を“食べる”“タマック”という意味の2つの食べかたがカシュガルではどのようにみられたのかを確認していく。

ウルムチのウイグル族家庭でのナンの配膳には、ナンをテーブルに放置するという「放置型」という方法があった [熊谷 2004: 8]。「放置型」は、ナンが乾いた食べ物であることと、新疆が乾燥した気候であることによるもので、その配膳方法によりいついかなる時間においても食べることができるが、ウルムチにおける配膳の特徴であった。このようなウルムチの状況とカシュガルとで異なるのは、カシュガルでは食卓と呼べる家具が家庭内に存在していないため、食卓への「放置型」と呼べる配膳形態が見られなかった点である。食事は床にダスティハン (dastihan) という布をしいて行なわれ、食後ナンはその布に包み片付けられる。片付ける場所は、時に応じて異なるが、総じて高めの場所である。ただしこのように配膳され片付けられるカシュガルのナンを、調理の必要なくいつでも食べられるものとして“放置”されていると考えるならば、ウルムチとカシュガルとでその考えに大差は生じない。以下は各家庭の滞在初めに筆者がかけられた言葉である。

事例1: Y家妻「コサック・アチカン・ボルサ・ナン・ヤン (qorsiqngiz achqan bolsa nan yeng / お腹が空いたらナンを食べなさい)」

事例2: Z家夫「コサック・アチカン・ボルサ・ナンニ・テピップ・イエ。ヤキ・○○ゲ・ナン・ベル・デ (qorsoqoin achqan bolsa nanni tepip ye, yaki ○○ ge nan ber de / お腹が空いたらナンを探して食べなさい。あるいは○○(家族の名前)にナンをください、と言いなさい)」

12) 「食べる」ものにも「飲む」「チャイ」に該当する食べ物があり、この区分は中間的要素に属する食べ物も多く含むものである [熊谷 2004]。本論ではこの区分を大まかに示すにとどめる。

事例1、2は、Y家・Z家の人々が、滞在はじめの筆者に対し、空腹を我慢することのないようにとかけてくれた言葉である。この言葉からは、居住者からの気遣いが、ナンの食べかたという点に示されている、と同時に、ナンが、いつでも食べられる乾燥した食べ物であるということを示しているように思われる。

ウルムチにおける調査では、ナンと飲み物の組み合わせ、そしてナンとスープ料理との組み合わせを「飲む」と言い、「食事(タマック)」を「食べる(イエイツシュ)」こととは区別されていることを指摘した[熊谷 2004: 10]。そのウルムチの事例では、粥などの食事をとっても「では何も“食べて”いないのだね」と言われてきた。スープ料理を「タマック」と呼ばない事例は、カシュガルでも同様にみられる。

事例3：X家：X家次女、母親の胃腸の調子が悪く、薬効のある野菜類で粥(ショウグルチ / showigürüch)をつくる。昼ごろに家に帰ってきたX家次男が「何か食事(タマック)はあるか」と問うと、X家次女は「今日は食事(タマック)はつくらなかった」と答えた。

事例3から読み取ることができるのは、粥(ショウグルチ)が「タマック」のカテゴリーとは考えられていないということである。ここから、ナンと組み合わせるものを「タマック(食事)」ではないとする組み合わせの配列はカシュガルにも同様に存在することがわかる。このようにウイグル族の食べ物は、ナンとの組み合わせである「飲む」もの、あるいは単独で食べられる「タマック」との2種類に分けられている。この組み合わせの存在は、普段の会話においても、異なった側面からも言いあらわされることがあった。

事例4：X家：X家次女に対し「ウイグル族はヨーグルトをあまり飲まないようだ」と指摘すると、X家次女は「アトシュにはたくさんの果物がある。だからヨーグルトはあまり飲まないのだ」と答えた。

このX家次女による返答は、果物とヨーグルトをともに、「茶」とナンの組み合わせにおける、「茶」の位置にあるものとして区分していることを示している。ウイグル族の間では、「スイカ」とナン、あるいは「メロン」とナン、というセットが食され、「スイカ」あるいは「メロン」がある場合には、ナンがあるのみで「茶」は供されない。それは、「スイカ」と「メロン」が「茶」と同じ位置づけにあるものとされており、そのような位置にある食べ物が同時に2つ以上食卓に並べられないようになっているからである。事例4におけるX家次女の答えは、この「茶」に代わるナンとの組み合わせにおいて、果物が、ヨーグルトよりも好まれて「茶」の位置におかれているため、果物が豊富なアトシュにおいてはヨーグルトがあまり食卓には出されない、ということの意味している。

カシュガルのX、Y、Z3家庭においてX家では3日間、Y家、Z家では6日間ずつ、計15日間の食事の取られ方を観察した。その結果を表にしたものが節の末尾に掲げた表1である。

これによって見いだせる点は2つある。1つめは、多くの場合に食事の内容がウルムチと同様に日に1度の「タマック」、それと複数回の「チャイ」という内訳になっていることである(表1「タイプ」参照)。その日は、計15日間の調査日数のうちX家6月26日、Y家4月1日、4月2日、4月3日、7月6日、Z家2月27日、6月19日、6月20日の8日間である。1日1回の「タマック」をどの時間に配するかは、各家庭で異なっていた。X家とZ家では昼にタマックをつくる傾向があるのに対し、農村のY家では昼間は暑く忙しいため夜にのみタマックをつくっていた。そして、

どの家でも同じだった点は、朝は、必ずナンと茶で始まる点であった。タマックが2度以上食されている日はX家6月25日とZ家の6月18日である。そのうちX家6月25日X-13は、事前に電話で来訪を告げられていた客が来なかったため、客の為に残しておいたポロを在宅者同士で囲んだものであり、Z家6月18日Z-15はZ-14において応対されていた客が、手土産として持参してきていたポロを、その日のうちに食したものである。このことは、普段は1日1回の「タマック」、複数の「チャイ」だが、機会さえあれば1日に何度でもタマックの共食を行う、というウルムチでの事例と同じであり [熊谷 2004: 16]、同時に、機会がなければ1日1回のタマックと複数のチャイというウルムチと同様のサイクルとなっているといえる。そして、時にはタマックを作らない「チャイ」だけの日が見られる点もウルムチと同様である (Y家7月7日と7月8日)。

このような1回の「タマック」、そして複数の「チャイ」によって構成される食事パターンを、Z家妻は「大多数の家では1日1度のタマックをつくり、他はナンと茶を飲む。農村には1日に1回のタマックをつくることさえ出来ないところがある」というように述べていた。この言葉の後Z家妻が筆者に「日本ではどうか」と聞いてきたため、日本では日に3度「食事(タマック)」をつくると答えると「日本では朝から「食事(タマック)」をつくるの?!」と驚かれた。このことから、タマックが日本語でいう「3度の食事」などとは異なる概念であることがわかる。

ナンの食しかたについてウルムチからは見いだすことのできなかつた名称があげられる。それは、カシュガルで多く使用されている「ナシタ(nashta)」という言葉である。「ナシタ」はウルムチでは「カシュガルのほうで使われる方言」とされており、ウルムチでは具体的に内容と用法を観察することができなかつた。その言葉は『維漢詞典(ウイグル語-漢語辞典)』では漢語で「早飯」、つまり朝ごはんとは訳されていた [廖, 马(編) 1047]。しかし実際には、ナシタは「朝ごはん」を指すわけではない。ナシタとは、聞き取りによれば「エッティゲンデ・ビリンチ・ケッティム・イーゲン・ナン(朝、一番初めに食べられるナン / etigen de berinchi qetim yigen nan)」を意味するという。以下は、Z家において「ナシタ」への言及がみられた事例である。



事例5 : Z家3月5日 : (翌日のもてなしを共に準備する女性達とで朝のチャイ)、ピヤレ(小椀)とチネ(大丼)の2つを渡され、「ピヤレ・ビレン・ナシタ・クリップ・チネデ・チラップ・ヤン(小椀の茶でナンを食べてから、大丼にナンを砕いて、茶でふやかして食べなさい / piyale bilen nashta qilip chinede chilap yang.)」と言われる。

写真1 Z家3月5日の「ナシタ」と「チャイ」

※1人2椀がセット。小椀がナシタ用、大椀がナンをふやかして食べる為のもの

事例6 : 事例1の翌日、敷布のナンの前で、井ひとつだけを渡されたため、「今日はナシタをしないか?」と筆者が聞くと「ブギン・ナシタ・クルマイ・チャイ・シチミズ(今日はナシタをしないか?)」

いでチャイを飲むだけにします / bügün **nashta** qilmay chay ichmiz)」と言われる (もてなしの準備で忙しかった)。



事例7：Z家3月7日：宿泊していた客をもてなすために早朝からハルワ (halwa) をつくる。敷布には茶とハルワの椀ふたつずつが並び「**ナシタ**・クリップ・ハルワ・シチン (ナシタ [ナンを食べる] をしてからハルワを飲みなさい / **nashta** qilip halwa ichng)」と言われる。

写真2 Z家3月7日の『ナシタとハルワ』 ※左がハルワで右が茶

事例5、6、7において示されるのは、小さな椀にナンを浸しながら食することがナシタと呼ばれ、それ以外の食べかた、つまりナンを大椀で粥状にふやかして食すること、ハルワという飲み物に浸して食することが、ナシタとは別に扱われていることである。なぜナシタがとられなければならないかについては、「朝はナンと茶からでなければお腹を壊したりするから」というように説明された。普段、朝はナンと茶の組み合わせによって始まるウイグル家庭において、ナシタという行為が意識して行われることは少ない。ナシタがとられる状況は、客と朝食をともにした事例5のような場合、そして早朝からナンと茶以外のものがとられる事例7のような場合であり、事例以外では朝からご馳走の「タマック」を食べる機会である断食月などにおいてみられた。他のものの調理がされた際には、つとめてナシタの準備が行われ、他の料理を口にする前にナシタ、つまりナンを茶に浸しながら食することがすすめられるといえる。

このようなナシタの意味と摂られ方からは、ナシタが、いつでも食べていい食べ物であるナンの存在による“最初の1口”という、時系列的な分節の1つとなっていることがわかる。それは日本に見られるような、“朝食”“昼食”といった1度にまとまった量の食事をならべる概念とは異なり、1日に何度もとられる「チャイ」という食事のとりかたの1つとして分節化された名称であると考えられるからである。

ここまでの考察をまとめると、ナンと茶、あるいはナンと水気のあるもので構成される「チャイ」「飲む」と、ナンを伴わない「タマック」とによる食事のとられかたが、カシュガル家庭にも見いだすことができるものとしてあり、いつでも食せる食物ナンは、少量ずつナンを食するという行為によって構成される、最初の1口という概念を食べかたのひとつとして単位化している、ということになる。次節ではこれまで確認してきたこの食事に、人々はどのように集まるのか、という点をみていく。

4月2日 (春)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Y家夫	Y家妻	調	次男	3男	4男	5男	6男	妻方・男
Y-5	6:45	○	ナン茶	①	①	①	①	①	①	①	①	①
Y-6	7:15	○	ナン茶									
Y-7	7:30	○	ナン茶									
Y-8	2:00	○	ナン茶									
Y-9	4:30	○	梨									
Y-10	8:20	△	マンタ	②	②	②	②	②	②	②	②	②

4月3日 (春)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Y家夫	Y家妻	調	次男	3男	4男	5男	6男	長男	妻方・友	6男・友	6男・友
Y-11	7:15	○	ナン茶	①	①	①	①	①	①	①	①	①			
Y-12	12:45	□	スユカシ											②	②
Y-13	1:25	□	スユカシ												
Y-14	3:50	○	ナン茶												
Y-15	7:30	▲	ラガマン	②	②	②	②	②	②	②	②	②			

7月6日 (夏)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Y家夫	Y家妻	調	次男	3男	4男	5男	6男	長男孫	妻方・女	妻方・子	長男嫁	近所・女	壁塗師	壁塗師	
Y-16	7:55	○	ナン茶	①	①	①	①	①	①	①	①	①							
Y-17	10:40	△	肉ナン																
Y-18	5:40	▲	ラガマン																
Y-19	8:00	▲	ラガマン																
Y-20	8:40	▲	ラガマン																

7月7日 (夏)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Y家夫	Y家妻	調	次男	3男	4男	5男	6男	長男孫
Y-21	7:30	○	ナン茶	①	①	①	①	①	①	①	①	①
Y-22	8:20	○	ナン茶									
Y-23	12:30	○	ナン茶									
Y-24	10:00	□	スユカシ	①	①	①	①	①	①	①	①	①

7月8日 (夏)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Y家夫	Y家妻	調	次男	3男	4男	5男	6男	近所・女
Y-25	7:10	○	ナン茶									
Y-26	7:50	○	ナン茶									
Y-27	10:30	□	スユカシ									
Y-28	12:30	○	ナン茶	①	①	①	①	①	①	①	①	①
Y-29	13:30	○	ナン茶	①	①	①	①	①	①	①	①	①
Y-30	21:40	○	ナン茶	①	①	①	①	①	①	①	①	①

Z家

2月26日(冬)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Z家夫	Z家妻	調	次女	次男	3男	長女	長女孫	妻方・女
Z-1	7:00	○	ナン茶	■	■	■	■	①	①			
Z-2	8:00	○	ナン茶	①	①	①	①	■	■			
Z-3	12:30	▲	ラゲメン	①	①	①	①	①	①	①	①	①
Z-4	9:00	△	マンタ	①	①	①	①	①	①	①	①	

2月27日(冬)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Z家夫	Z家妻	調	次女	次男	3男	長女	長女孫	妻方・女	Z家妻・母
Z-5	8:10	○	ナン茶	■	①	①	①	①	①	①	■		
Z-6	12:00	○	ナン茶	①	①	①	①	■	①	①	①	①	
Z-7	9:00	▲	ラゲメン	①	①	①	①	①	①	①	①		①

2月28日(冬)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Z家夫	Z家妻	調	次女	次男	3男	Z家妻・母	長女	長女孫
Z-8	7:10	○	ナン茶	■	■	■	■	①	①			
Z-9	7:20	○	ナン茶	①	①	①	①	■	■	①	①	①
Z-10	12:10	▲	ラゲメン	①	■	①	①	①	①	①	①	①
Z-11	9:10	□	ナン粥	①	■	①	①	①	①	①		

6月18日(夏)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Z家夫	Z家妻	調	次女	次男	3男	職人	職人	近所	近所
Z-12	7:30	○	ナン茶	中	中	中	中	中					
Z-13	12:03	▲	ラゲメン	中	中	中	中	中	中	中	中		
Z-14	1:50	▲	ラゲメン	■				■	■			⑤	⑤
Z-15	7:30	▲	ポロ	■	中	中	中	中	中				
Z-16	8:20	○	ナン茶	中	中	中	中	中	中				

6月19日(夏)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Z家夫	Z家妻	調	次女	次男	3男	職人	職人
Z-17	8:00	○	ナン茶	中	中		中	中	中		
Z-18	1:00	▲	ラゲメン	⑤	⑤	中	中	中	中	中	中
Z-19	7:50	▲	ラゲメン	中	中	中	中	中	中		

6月20日(夏)

食事番号	時間	タイプ	食事内容	Z家夫	Z家妻	調	次女	次男	3男
Z-20	7:00	○	ナン茶	■	■	中	中	中	
Z-21	7:30	○	ナン茶	中	中				
Z-22	11:45	▲	ラゲメン	中	中	中	中	中	中
Z-23	5:35	○	パン・ヨーグルト	中	中	①	中	■	中
Z-24	6:40	○	パン・ヨーグルト	■	■	中	■	①	①
Z-25	6:50	□	ナン粥	■	■	中	中	中	中

行動記号凡例

- 食事 (白文字は食事をした部屋・場所を示す)
- 調理
- 睡眠
- 外出
- コーラン読誦 (限Z家)
- 外在 (寝泊まりしていない人物の不在)

食事タイプ記号凡例

- 「チャイ」(ナン・茶・果物)
- 飲む「タマック」
- △ 「チャイ」に変化する「タマック」
- ▲ 「タマック」

※注1 それまでいなかった人物が食卓に中途参加してきた場合、それまでの参加者の食事場所は未記入のままです。
 ※注2 食事参加者名における「妻方・女」は妻方親族女性、「妻方・子」は妻方親族のオイ・メイを表す。
 ※注3 Z-14におけるZ家妻にはラゲメンは食されていないが、ナン茶は共にされていた。
 ※注4 食事タイプ△の分類は熊谷[2004]の分析にしたがい、本論では詳細を割愛した。
 ※注5 「食事」中の白文字は食事が行われた場所を示し、白文字のない部分は、他の人物が参加してきた際、それまでとられていた食事が継続している様子を示す。
 ※注6 「食事」中の白文字が示す食事の場所の移動については、本論では論じていない。

2. 食事をとるのは食べ物を「見た」人物——ニスイウエがもたらす食事の共有——

これまで、カシュガルにおいてみられる「チャイ」「タマック」の構成を、ウルムチのウイグル族の事例と比較しながら述べてきた。本節では、そうした食事の場の人々がどのように集まっているのかをみていく。そして、集まる際に言及される「ニスイウエ」という言葉の使われかたに注目し、その意味をふまえて分析をおこなっていく。

本節末尾にある表2は、表1に記した食事がとられた際にいた、在宅人数¹³⁾と食事参加人数の一致率をあらわしたものである。ここから述べることでできるカシュガルの家庭の食事にみられる特徴は、3点ある。1点目は、食事が行われる際、個食する人物や食卓につかない人々がほとんど見られなかったということである。X家で見られる参加率不一致の理由はX家夫が頻繁に裏庭でクルアーンを読んでおり、家人が呼び忘れていたことによる。Y家による不一致は、3男と4男とがそれぞれ農作業の合間に立ったまま1人で茶を飲みナンを食していたもの、そしてY家妻がナンを焼いてくれた女性にねぎらいでスープ料理を一杯提供したことによっている。Z家では他の家人が日課としてのクルアーン読誦をしていた間に、登校時間のせまっていた次男と3男とが2人でチャイをしたことによる。これらの状況が示すのは、1人で食べることを習慣としていた人物がほとんどおらず、なんらかの理由で食事を共にしないメンバーを除いて、すべての食事で在宅者がそろっていたことである。

2点目は、食事の回数がウルムチと比較した場合、少ない点である。ウルムチでは3家庭における計8日間のデータにおいて1日平均13回の食事が取られていたが、カシュガルではのべ15日間のデータで1日平均5回の食事が取られている〔熊谷 2004: 15〕。カシュガルでは1日というタイムスパンにおいて、ウルムチに見られるほど何度も食事がとられるものにはなっていない。それは、全員が仕事や学校の用事を持つために出入りも多く、成員が食卓にそろいにくいウルムチの家庭に対し、退職して夫婦が2人とも家にいるX家、家の周辺にある畑にて農作業を行なうY家、妻と娘がほとんど出かけず、用事がなければ夫も家にいることがある、というカシュガルの暮らしかたにおける時間的な余裕による、と考えることができる。そのかわりウルムチでは見られず、カシュガルで見られた点がある。それは、居住者が食事をとっているあいだに訪問者があらわれ、その人物も加えて食事がとられる、という様子が複数例見られる点であり、3点目の特徴となっている。

X・Y・Z 3家庭における家庭外の人物の食事参加者数を数えると、調査において食卓に参加した人数はX家ではのべ3日間で26人、Y家では6日間で17人、Z家では6日間で16人となる。そのべ人数は、ウルムチで8日間に14(+7)¹⁴⁾人、カシュガルでは15日間に59人であり、平均すると、ウルムチでは1日1.75(2.62)人、カシュガルでは平均3.9人である。このような多数の客が家庭の食事に参与してくる理由には、まず第1に来訪者には食事を提供するものだという考えがあること、第2には食事を“見た”“聞いた”人には食事を提供すべきであるという考えかたがあることが挙げられる。

カシュガルのウイグル族の間には「良い客は食事の間にやってくる、悪い客は悪口を言っている間にやって来る（ヤクシ・ミヒマン・タマック・ヌン・ウスティゲ、アスキー・ミヒマン・ゲップヌン・ウスティゲ / yaxsh mihman tamaqing ustige, eski mihman gepning ustige.）」という言葉がある。これは、家にやってきた客には必ず食事を提供しなければならないため、食事時に客

13) 表2の「在宅人数」は、在宅中の居住者と家庭外の他者とを合計した人数をさしている。

14) 7人は住居内ではなく住居前のトヌール周り

が来ると、手間がはぶけて丁度良い、つまり、食事中に来るものがよい客だ、という意味を持っている。

このため、他家を訪問する際に人々は、食事をしているであろう時間を推測し、その時間に訪問する。また訪問の際、事前に連絡をするということは少なく「5人より多くなるような場合には連絡を入れてから行くが、1人2人で行く場合には連絡はしない」(X家妻の弟)。それは、食事の間にやってくる人物が、あまり事前連絡を入れて来るものではないことを示している。このような考えかたがあるため、家庭での調理は予定外の他者を含めておこなわれており、予定していない来訪客を日常的にその食卓に迎えていた。そして、そのような時でも食事の量はほとんどの場合充分間に合っており、筆者はそのたびに料理の許容する人数の幅の大きさに驚かされた。以下は、X家で調理を担当していた際のX家次女と筆者とのやりとりである。

事例1：X家7月24日：昼食は、つくっている時にあらわれる人間すべてが共食の対象になる。X家次女が料理を作っている時に、誰の、何人分をつくっているか、と聞くと、「父、母、兄、姉、兄嫁、今日来る予定の友人」と答える。しかし午前11時前後になって、叔父やイトコといった人々が現れて食事を待ち始める。お兄さんたちにつくっていたわけではないの？と聞くと、兄は今日カシュガルに仕事に行ったようでこないみたいです、と答える。友人は？と聞くと、来ませんねえ、なんでですかねえ、とのこと。結果、まったく予定と異なる面々が食事を待ち始めることについて、作る予定と違う人たちが皆食事をしていくのか、という「親戚なのに、食事をするのはおかしいですか？」と不思議そうに聞かれる。

事例2：X家日曜、X家次女「今日は日曜ですからきっと甥や姪がたくさん食事に来ますよ」という。実際には拍子抜けするほど誰も来なかった。

事例1・2が示しているのは、家庭における調理が、その日に食べる人数を把握しないままにおこなわれているということである。それは、調理が決まった人数に対してではなく、状況に応じ提供できるように行なわれていることを示している。

食事が予想外の来客に対しても間に合っていることには、2つの要因を考えることができる。1点目は、食事の大半が、ナンとの組み合わせであるという点である。ナンは乾燥した保存のきく食品であり、食べる前の調理を必要としない。そのため人数の増加にも特に手間をかけることなく対処できる。もう1点は、料理がひとつの鍋で調理したものがほとんどだという点である。そのため人数を考え調理する料理とは異なり、料理を分け合うことあまり難しいことではなくなる。麺の生地などは、あまっても次の料理にまわすことができる。しかし、このような料理の幅をもってしても、量が足りなくなってしまう日があった。以下は、Z家での料理が足りなくなった稀な事例である。

事例3：昼時にZ家夫が急に客(成人男性3人)をつれてきたため料理(ラグメン)が足りなくなった。足りなかった分は、Z家夫が自分の食べる分を客に提供することによって間に合わされた。のちに客を送り出してから、Z家夫が妻に対して「料理を作るときに、“これはニスィウェ (niswe / 他者の取り分) の分”ともう一掴み余計に小麦粉をいれる習慣をつけなさい」と説教をした。

事例3からは3点述べることができる。1点目は、Z家夫の対応のありかたから、急な客にも対応することのほうが正しい、と考えられていることを読み取ることができること、2点目は、主人の分を客に提供するという客優先の思考が見られること、3点目は、客の分に対応した調理が、ニスィウエという言葉とともに行なわれていたことである。

Z家夫の言葉に見られるニスィウエ (niswe) とは、こうした食事の提供において重要な役割を果たしている言葉である。ニスィウエという言葉はウイグル語の辞書にも載っていない¹⁵⁾。事例3では「取り分」という意味であることが判明し、他の事例では、さまざまな使われ方をすることが示される。その点を以下に検討していく。

事例4：X家：1月28日 家でオプケ (öpke / 羊の臓物の煮物) をつくっていた時、X家妻の妹が来訪した。しかし他の来客へのもてなしで忙しかったX家の様子を見て帰っていった。次の日X家妻は、次女と筆者とにオプケを渡し「ニスィウエ」として妹の家に届けるように言ってきた。筆者がニスィウエとは何かと聞くと、「昨日妹が来たとき、彼女はオプケを見た。そして見たけれど食べなかった。だからニスィウエをあげなければならない」といった。では、見なかったのならあげなくてもいいか、と聞くと、ニヤリとして「見なかったらあげなくていい」と言った。

この事例から、ニスィウエは“見た”と言う行為によって発生した、見せた側が取り分を与える義務というように読み取ることができる。この取り分の特徴は、もし外部者が食事をもらうことを恥ずかしかって帰ろうとしたり、その他の理由で“見た”のであっても帰ってしまった場合、事例4のようにそれをわざわざ包んで届けに行く、ということが行なわれている点である。渡しに行った際には「ブ・ニスィウエ・ボーガンディンキン (これは、ニスィウエですから / bu **niswe** bolghandikin)」と言って手渡すことが行なわれ、ニスィウエであることが明示される。そして、ニスィウエ発生の契機には“見る”ということとともに“聞く”ということも含まれていた。

事例5：X家：2月5日 昼にX家次女が婚出した姉に電話し「おいしいショイラ (shoyla / 人参粥) をつくった。食べに来ないか」と伝えた。それに対して婚出姉は、すでに夫の実家で料理をつくったところだ、と答えた。その電話のあと、X家次女は、婚出姉はもう料理をしたとっていたのにもかかわらず姉のためにショイラを取り分けておいていた。筆者が、婚出姉はもう食事をとったと言っているのだからいらぬのではないかと聞くと、電話ですでに知らせたのだから、これはニスィウエであるという。そして、取っておけば姉は味をみるができるから、と答えた。

事例5から読み取ることができるのは、“聞かせた”ということも、ニスィウエ発生の契機となっている点である。これらの事例からは、“見た”側、“聞いた”側が取り分を得る機会となっている点に加え、“見せた”側が届けに行ったことにも見られたように、“見せた側”、“聞かせた側”が与える権利を得たというような、積極的な提供をおこなう側面も見られる。このことから食事が“見た”側“見せた”側との双方に、積極的な行動を促すものとしてある、というように指摘できる。以下の事例は3、4、5と同様に“見た”こと、“聞いた”ことがニスィウエの義務を発生させた状況の事例である。そこではニスィウエという言葉が使われなくても、“見た”“聞いた”ことが

15) ニスィウエの語に関して小杉泰氏に、アラビア語の *naṣīb* との類似をご指摘いただいた。アラビア語の *naṣīb* は「取り分」という意味においてニスィウエと類似している。

取り分を発生させる契機となっていることが示される。

事例6：Z家：3月27日 Z家では息子が外にいた父親に「食事ができた」と声をかけにいったところで父親が他の誰かと一緒にいたことを発見し「どうしよう食事を出さなければ」とあわてた。

事例7：X家：2月11日 朝8時、料理をしていたX家次女に同じアトシュ市内の友人から電話がかかってくる。「何をしているの」と問う友人に対し「ラゲメンをつくっている」と答え、それを言ったことによって「家に来ないか」と誘い始めた。友人はやってきた。

事例8：Y家：8月4日 暑い日であったので夕刻中庭で食事をとっていると、近所の奥さんがふくらし粉を借りにやってくる。「食事を共にどうぞ」というY家の家人に対し、近所の奥さんは「もう食事をとった」といった。そして「夫がまだ（帰宅していないため）食事をしていないので夫に持って行く」といって、料理を受け取り帰って行った。

このようにニスイウェは見ること、聞くことによって発生し、提供する側にとってだけでなく、見たり聞いたりした側にとっても積極的に共有する対象となっていることがわかる。このように食事は、ニスイウェという言葉とともに、食べることを共有される。そしてそれは、食べるということが、家庭内、家庭外の人物に関わらず、“見た”人物に常に共有されるべき場として存在しているということを示している。

本節ではニスイウェという言葉に対する考えかたとともに、カシュガルにおける食事の共有が、食事を“見た”“聞いた”ことによること、そしてそれは家庭の食卓を、居住者と家庭外の他者をも含めた人々の場としていることを示してきた。次節では、このような食事の場に迎えられている客とは結果的に誰であり、それが家庭の食卓という場をどのような性格を帯びた場としているのかを確認していく。

表2 X・Y・Z家における在宅者・食事参加人数一致率

X家

1月28日(冬)						
食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
X-1	○	ナン茶	3	3	100%	
X-2	○	ナン茶	2	2	100%	
X-3	▲	ナーレン	9	9	100%	
X-4	○	ナン茶	17	17	100%	
X-5	○	ナン茶	10	10	100%	

X家1月28日の食事参加人数一致率
100%

6月26日(夏)						
食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
X-14	○	ナン茶	5	5	100%	
X-15	○	ナン茶	6	5	83%	X家夫裏庭にいる
X-16	▲	ラゲメン	7	7	100%	
X-17	○	ナン・スイカ	3	3	100%	
X-18	○	菓子類・茶	11	10	90%	X家夫裏庭にいる
X-19	○	菓子類・茶	11	10	90%	X家夫裏庭にいる
X-20	○	ナン・牛乳	6	6	100%	

X家6月26日の食事参加人数一致率
93.87%

6月25日(夏)						
食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
X-6	○	ナン茶	3	3	100%	
X-7	○	ナン茶	6	6	100%	
X-8	○	ナン茶	8	8	100%	
X-9	▲	ポロ	8	8	100%	
X-10	○	桃・杏	7	6	85%	X家夫裏庭にいる
X-11	○	桃・杏	9	8	88%	X家夫裏庭にいる
X-12	○	桃・杏	9	9	100%	
X-13	▲	ポロ	11	11	100%	

X家6月25日の食事参加人数一致率
96.72%

Y家

4月1日(春)						
食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Y-1	○	ナン茶	2	2	100%	
Y-2	○	ナン茶	9	9	100%	
Y-3	○	ナン茶	3	1	33%	3男個食
Y-4	△	ラゲメン	8	8	100%	

Y家4月1日の食事参加人数一致率
90.90%

家庭の食事からみるウイグル族のつきあい

4月2日(春)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Y-5	○	ナン茶	8	8	100%	
Y-6	○	ナン茶	9	9	100%	
Y-7	○	ナン茶	8	8	100%	
Y-8	○	ナン茶	7	7	100%	
Y-9	○	梨	6	6	100%	
Y-10	▲	マンタ	8	8	100%	

Y家4月2日の食事参加人数一致率
100%

4月3日(春)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Y-11	○	ナン茶	8	8	100%	
Y-12	△	スユカシ	5	5	100%	
Y-13	△	スユカシ	4	4	100%	
Y-14	○	ナン茶	3	1	33%	4男個食
Y-15	▲	ラグメン	8	8	100%	

Y家4月3日の食事参加人数一致率
92%

7月6日(夏)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Y-16	○	ナン茶	9	9	100%	
Y-17	△	肉ナン	11	11	100%	
Y-18	▲	ラグメン	9	9	100%	
Y-19	▲	ラグメン	2	2	100%	
Y-20	▲	ラグメン	4	4	100%	

Y家7月6日の食事参加人数一致率
100%

7月7日(夏)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Y-21	○	ナン茶	6	6	100%	
Y-22	○	ナン茶	3	3	100%	
Y-23	○	ナン茶	7	7	100%	
Y-24	△	スユカシ	8	8	100%	

Y家7月7日の食事参加人数一致率
100%

7月8日(夏)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Y-25	○	ナン茶	1	1	100%	
Y-26	○	ナン茶	6	6	50%	ナ雌女性のなぞがい
Y-27	△	スユカシ	2	1	100%	
Y-28	○	ナン茶	6	6	100%	
Y-29	○	ナン茶	6	6	100%	
Y-30	○	ナン茶	8	8	100%	

Y家7月8日の食事参加人数一致率
96%

Z家

2月26日(冬)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Z-1	○	ナン茶	6	2	33%	息子2人登校準備
Z-2	○	ナン茶	4	4	100%	
Z-3	▲	ラグメン	9	9	100%	
Z-4	△	マンタ	8	8	100%	

Z家2月26日の食事参加人数一致率
85%

2月27日(冬)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Z-5	○	ナン茶	6	6	100%	
Z-6	▲	ボロ	8	8	100%	
Z-7	○	ナン茶	9	9	100%	

Z家2月27日の食事参加人数一致率
100%

2月28日(冬)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Z-8	○	ナン茶	2	2	100%	
Z-9	○	ナン茶	7	7	100%	
Z-10	▲	ラグメン	8	8	100%	
Z-11	△	ナン粥	6	6	100%	

Z家2月28日の食事参加人数一致率
100%

6月18日(夏)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Z-12	○	ナン茶	5	5	100%	
Z-13	▲	ラグメン	8	8	100%	
Z-14	▲	ラグメン	5	2	40%	※接客
Z-15	▲	ボロ	5	5	100%	
Z-16	○	ナン茶	6	6	100%	

Z家6月18日の食事参加人数一致率
89%

6月19日(夏)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Z-17	○	ナン茶	6	6	100%	
Z-18	▲	ボロ	8	8	100%	
Z-19	○	ナン茶	6	6	100%	

Z家6月19日の食事参加人数一致率
100%

6月20日(夏)

食事番号	タイプ	食事内容	在宅人数	食事人数	人数一致率	不一致の理由
Z-20	○	ナン茶	3	3	100%	
Z-21	○	ナン茶	5	5	100%	
Z-22	▲	ラグメン	6	6	100%	
Z-23	○	ナン・ヨグルト	5	5	100%	
Z-24	○	ナン・ヨグルト	3	3	100%	
Z-25	△	ナン粥	4	4	100%	

Z家6月20日の食事参加人数一致率
100%

全体一致率計算

	在宅合計	食事合計
X家1/28	41	41
X家6/25	61	59
X家6/26	49	46
Y家4/1	22	20
Y家4/2	54	54
Y家4/3	28	26
Y家7/6	35	35
Y家7/7	24	24
Y家7/8	29	28
Z家2/26	27	23
Z家2/27	23	23
Z家6/18	29	26
Z家6/19	20	20
Z家6/20	26	26
合計	468	451

全体一致率 96.36%

カシュガル のべ15日

食事タイプ記号凡例

- 「チャイ」(ナン・茶・果物)
- 飲む「タマック」
- △ 「チャイ」に変化する「タマック」
- ▲ 「タマック」

- ※ 一致率=食事参加人数÷在宅人数合計
- ※ 不参加・個食の理由がわかった場合は「不一致の理由」にてそれをコメントした。
- ※ X-13は来訪予定だった客のために残しておいたもの
- ※ Z-15のボロはZ-14における来客の手土産
- ※ Z-14 不一致: タマックの直後のタマックは食されなかったが「熊谷2004」ナン茶は共にされていた。

3. 展開する妻方つきあい

表3・4・5・6はX・Y・Z3家庭において20日～30日間おこなった、食事をともにした訪問客の人数調査のデータである。図4は表3・4・5・6をもとに、訪問客を妻方・夫方別に分類し表にしたものである。その結果、X・Y・Z家すべてにおいて、共通して確認できたのは、夫方に対する妻方来客の圧倒的多さである。

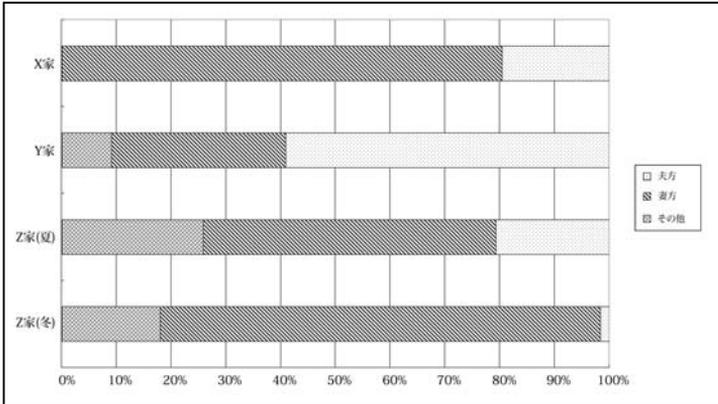


図4 3家庭において食事をともにした訪問客の妻方・夫方比率

このような客層における妻方への偏りは、親族の広がりについての家庭の成員による理解の程度からも見られるものである。例えばX家において夫方の関係がほとんど理解されていないという事例を挙げよう。

事例1：X家：X家で夫方の親族男性が宿泊した際（8月10日宿泊「夫方イト

コの子」¹⁶⁾）、筆者は「あのひとは誰か」と周囲に聞いてまわった。しかしX家次女やその兄嫁を含めて誰もその関係を答えられなかった。彼女達は彼を「X家夫の親戚」と言うのみであり、結局そのX家夫本人に聞くまでどのような関係の親戚であったのかを確定することができなかった（この人物以外にX家で女性をインフォーマントとしていて判別に困った人物はいなかった）。

事例2：X家およびZ家に関わる事例：筆者がX家次女に電話でZ家妻から聞いたX家夫のイトコにあたる人の家の結婚話をしていた時（Z家妻はX家夫のイトコにあたる。つまりこの時の会話はX家夫、Z家妻双方にとってイトコの間柄の人物〈女性〉についての会話）、X家次女が誰の話をしているのかよく解っていないようであった。筆者が「あなたのお父さんにとってイトコにあたる人の話ですよ」というと、X家次女は「お父さんの親戚のことはよく知りません」と言った。

このことは、客が妻方に偏重しているということと、特に家庭の女性に身近な親族つきあいが、

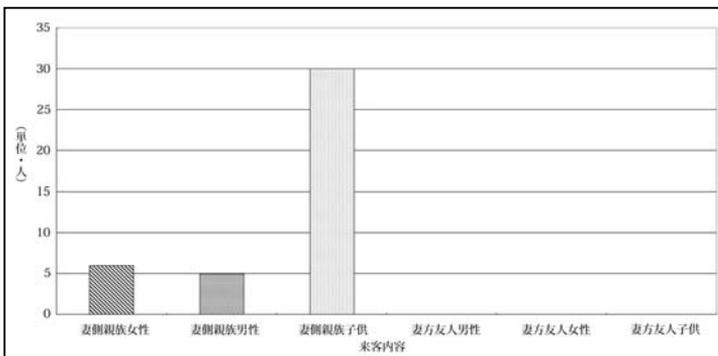


図5 X家における妻方来客のうちわけ

妻方を中心に展開していることを示している。ウイグル家庭において食事の場に迎えられる客の内容は、妻方に大きく偏っている。そしてその客の内容は、それぞれの家庭の妻によって異なっている。図5・6・7・8は、それぞれの家庭における妻方来訪者を親

16) 宿泊客のデータは本稿では割愛した。

族・友人・子供・男性・女性性別にあらわしたものである。この図5・6・7・8が示しているのはX、Y、Z3家庭における妻方のつきあいが、それぞれの家庭の妻ごとに異なっている、という点である。X家では、

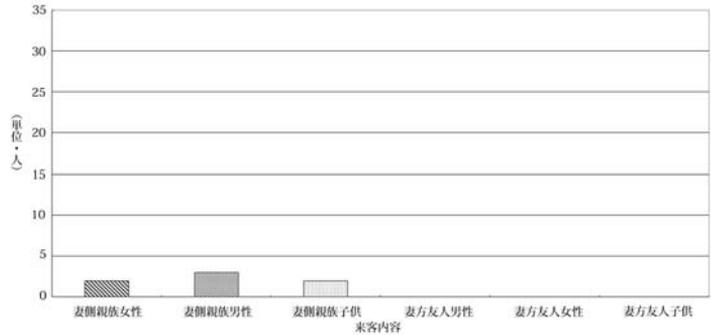


図6 Y家における妻方来客のうちわけ

来訪者の多くが妻方親族の子供によって占められている(図5)。Y家の客は他の2家庭に比べて相対的に数が少ない(図6)。ただしこれは調査した時期に理由がある。Y家では調査をした時期が、麦刈り作業の時期にあたってしまい、在宅者は総出で畑仕事をし、

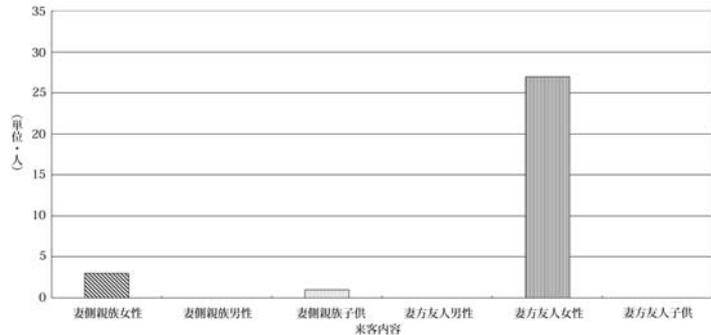


図7 Z家夏季における妻方来客のうちわけ

来訪者は麦刈りの進展の様子を伺いにきた人物ばかりになってしまったためである。Y家での来訪者に、比較的、妻方男性親族というカテゴリーが多いのは、Y家妻のキョウダイが多くを男性によって構成されていたためである。この男性はすべてY家妻の弟であった。Z家の来訪者はZ家妻の友人女性がほとんどである(図7・8)。この友人女性は子供をともなってくることも多かったため、客の中には子供が多くみられる。

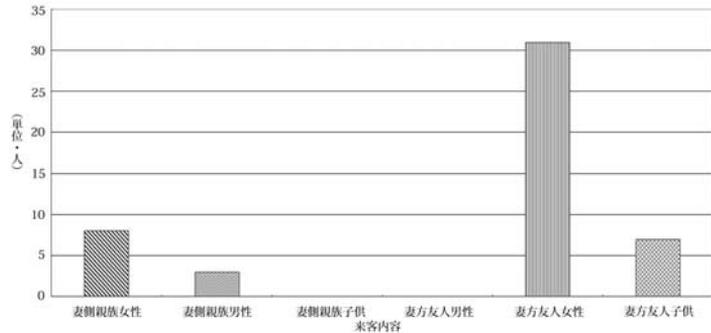


図8 Z家冬季における妻方来客のうちわけ

このような妻方の客に対し、夫方の客にどのような人物の来訪がみられたのか。夫方の来客は、X家では0人であった。Y家では親族が2名来訪しているが、Y家夫婦がイトコ同士でもあるため、妻方夫方の区別をほどこすことはあまり適切でない。Z家では夫方の来客が幾人か見られるが、これにはある傾向が見られる。それはZ家夫の友人男性を伴わない、かれらの妻達の訪問が見られる点である。彼女達の訪問理由はZ家姉の葬式に際しての挨拶であった。この来訪は、ウイグル族の慣習を示している。それは、ウイグル族の間で贈り物をたずさえて挨拶に行くことが、女性だけができる行為とされていることである¹⁷⁾。訪問において男性は手土産を持って行ってはならず、

17) こうした贈り物の携帯が女性のみによる行為となっていることは、新疆トルファン地区のウイグル家庭を調査し

「客としてあるためだけに他者の家に行ってもよい (ミヒマン・ボルッシュ・フチュンラ・バルドゥ / méhman bolush üchünla baridu)」とされている。それは男性に対する尊敬に基づくこととされているが、そうした慣習の存在は、同時に、挨拶行為に女性が行くことは必須であるが、男性は特に行かなくてもよい、と解釈されることもある。それは「近い親族であれば男性が来ることもあるが、友人やそれより遠い関係になれば、女性が来るもの」という言葉にあらわれている。

女性のみ客は、一般に親族であったとしても自分のキョウダイでない場合は男性は応対を控え、女性が応対する。Z家の話に戻れば、夫の友人男性の妻たちはZ家妻が応対すべき相手であった。夫同士の関係における挨拶行為が、妻同士によってとりもたれるものであったことを意味する。

図9は冬季のZ家における夫方来客の訪問者の性別、その訪問内容を示したものである。図9に示されるのは、妻方の4分の1以下であるZ家冬季の夫方来客のうち、4人が1回限りの商売相手に対する昼食の提供、1名が妻のいない友人男性であったことを除くと、残りの4人は友人の妻子及び娘、という男性を伴わない女性の訪問だったことである。このことは、夫同士のつきあいが妻によってとりもたれていることを示すとともに、夫自身の友人同士といったつきあいが、家庭の中ではほとんど行なわれていないことも意味している。

表7はZ家における冬季のZ家妻の外出先を示している。ここでみられるのは計12回のZ家妻による外出のうち、4回は妻方の用事、6回が夫方の用事、そして2回が子供の為の用事によって占められていることである。その内容は、布を選ぶなどの用事によるバザールでの買い物を除けば、すべてが他者の家に出かける用事である。そのうち2回は夫の友人、夫の親族の葬式という夫方の用事であった。このように外出先という点から間接的に見ても、家庭という場は女性が夫方のつきあいをとりもつつきあいの場としてあると考えることができる。

こうした3家庭の妻によるつきあいの中で、共通して指摘できる点を2点挙げておく。1点目は、妻方友人男性というカテゴリーが見られない点である。家庭の客は妻方の客が多くを占め、そこでは親族、友人関係の客が多数みられる。しかし、そこにおける特徴は、親族男性を除けば、男性がみられず女性に偏った関係がみられる点が指摘できる。2点目は、近所という関係についてである。表3・4・5・6では近所 qoshna と呼ばれた関係を聞き取りにより区別して記載している。この表3・4・5・6において近所の来訪件数がきわめて少ない点と、表7のZ家妻の外出先に近所が含まれないことが示すのは、こうした妻方に偏ったつきあいが、住居が近いという理由によって集まった人々同士のつきあいではない、という点である。ウイグル族女性の家庭におけるつきあいは、親族関係や友人関係といった選択された関係が成り立つ場として機能している。

ウイグル族家庭における食事をまじえたつきあいは、妻による妻方・夫方つきあいの展開される場であり、そこでは親族を除けば手土産を携えた訪問に女性が選ばれていたことと同様に、女性に偏ったつきあいが行われている。そしてそれは、居住する人々全員にとっても妻のつきあいを身近なものにしているといえる。

た劉によっても同様に指摘されている [劉：2004・86]。

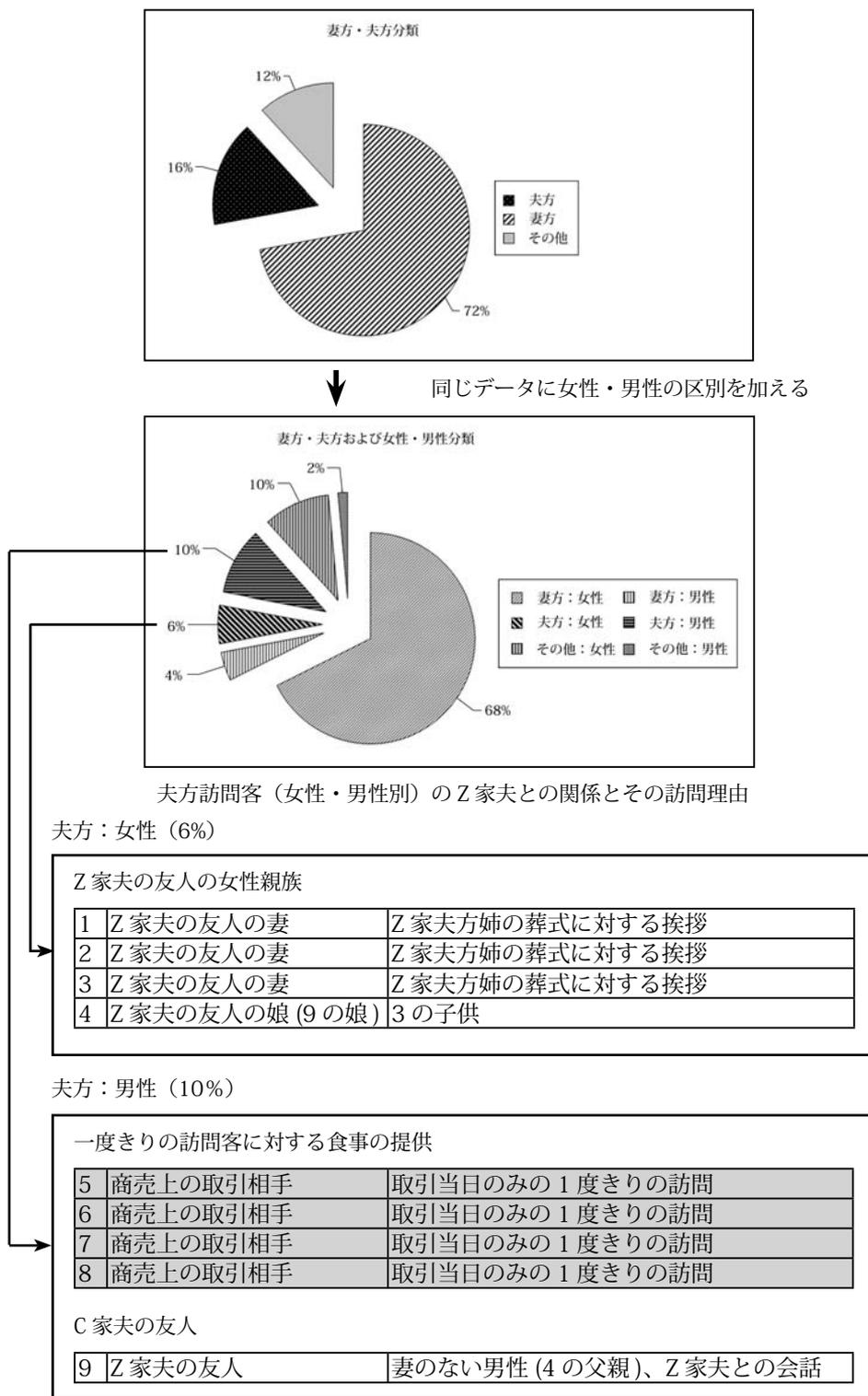


図9 Z家における夫方訪問客とその来訪理由

表3 X家7月24日～8月22日の24日間における訪問客データ

日時	訪問客	食事とともにした訪問客	人別
7月24日		婚出長男	●
		孫	◎◎◎
		妻方母違弟	●
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
7月25日		長男嫁	◎◎◎
		孫	◎◎◎
		妻方母違弟妹の子	◎
7月26日		長男嫁	◎◎
		孫	◎◎
7月27日		長男嫁	◎◎
		孫	◎◎
7月28日		長男嫁	◎◎◎
		孫	◎◎◎
		妻方母違弟妹の子	◎
7月29日		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方姪の友人	◎
7月30日		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		近所の主婦	☆
8月6日		妻方母違弟妹	◎
		妻方母違弟妹嫁夫	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
8月7日		長男嫁	◎◎
		孫	◎◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		長女の婚約者の父親	●
		長女の婚約者の母親	◎
8月8日		長男嫁	◎◎◎
		孫	◎◎◎
8月9日		長男嫁	◎◎◎
		孫1	◎◎◎
		妻方弟妹	●
		妻方弟妹の子	◎
8月10日		長男嫁	◎◎◎
		孫1	◎◎◎
8月11日		婚出長男	●●
		長男嫁	◎◎◎
		孫1	◎◎◎
8月12日		長男嫁	◎◎◎
		孫1	◎◎◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
8月13日		長男嫁	◎◎◎
		孫1	◎◎◎
		妻違弟妹	●
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
8月14日		婚出長男	●●
		長男嫁	◎◎◎
		孫1	◎◎◎
8月15日		婚出長男	●
		長男嫁	◎
		孫1	◎◎

		妻方母違弟妹嫁夫	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		近所の主婦	☆
8月16日		婚出長男	●
		長男嫁	◎
		孫	◎
8月17日		—	
8月18日		調査者不在	
8月19日		—	
8月20日		婚出長男	●●
		長男嫁	◎
		孫	◎◎
		妻方母違弟妹	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		次男の同僚	●
8月21日		—	
8月22日		妻方母違弟妹	◎
		妻方母違弟妹	●
		妻方母違弟妹	●
		妻方母違弟妹嫁夫	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		妻方母違弟妹の子	◎
		A家昔の近所	●
		A家昔の近所	◎

※ 長男夫婦及びその子は、住まいは別だがほぼ毎日食事を共にしていたため、客とは別とし来客人数分析では対象外とした。

表4 Y家7月1日～7月19日の19日間における訪問客データ

日時	訪問客	食事とともにした訪問客	人別
7月1日			
7月2日		長男夫婦子供	●
			◎
			◎
		妻方3番目の弟	●
7月3日		—	
7月4日		—	
7月5日		長男の嫁	◎
7月6日		長男	●
		長男の嫁	◎
		孫	◎
		妻方妹	◎
		息子	◎
		息子	◎
		斜め向いに住む主婦	☆
		壁塗の師匠と弟子	●
7月7日		—	
7月8日		—	
7月9日		夫婦双方にとっての従兄弟の姪	◎
		夫方父違姉の息子	●
		妻方4番目と5番目の弟	●
			●
		長男夫婦	●
			◎

7月10日	(妻の弟宅で食事会・全員参加)	
	妻方2番目の弟の嫁	○
	長男	●
	孫	◎
	長男の嫁	○
7月11日	夫方祖父&祖母の従兄弟	●
7月13日	隣家の3女	☆
	(布団縫いの手伝い)	
7月14日	—	
7月15日	コンクリート工	●
		●
		●
	隣家の長女	☆
	(炊き出しの手伝い)	
	ナン焼きおばあさん(冷茶・ねぎらい)	☆
	左隣の嫁(冷茶・ねぎらいついで)	☆
	長男	●
	3男の壁塗り師匠と弟子	◎
7月16日	—	
7月17日	—	
7月18日	長男	●
7月19日	—	

	妻方友人I+II	○
		○
		○
9月27日	夫方従姉妹の息子	●
	妻方友人I	○
9月28日	ベシクラムの親戚男性(関係聞けず)	●
9月29日	妻方友人Iとタナゴの女性	○
		○
9月30日	夫の商売上の知り合い	●
10月1日	夫方従姉妹の息子夫婦とその子	●
		○
		◎
10月2日	妻方異母兄の嫁+娘+婚出娘+孫	○
		○
		○
		◎
10月3日	夫方夫の父方従兄弟+息子	○
		◎
10月4日	妻方友人I	○
10月5日	—	
10月6日	(調査者とZ家長女とでベシクラムの妻方母宅へ)	
10月7日	妻方友人III+IV	○
		○
10月8日	妻方友人IV	○
10月9日	—	
10月10日	ベシクラムの親戚	●
	夜食に乞食の招待	●
10月11日	—	
10月12日	妻方友人	○
	家作り職人の監督	●
	妻方友人I	○
10月13日	—	
10月14日	妻方友人Iと他2名	○
		○
		○

※ X家での分析に合わせ、子供夫婦は来客人数分析の対象外とした。

表5 Z家9月3日～10月14日の34日間における訪問客データ

日時	訪問客	食事をともにした訪問客	人別
9月3日		妻方友人III+IV	○
			○
9月4日~5日	(4日~5日、調査者アトシュA家長女の結婚式準備へ)		—
9月6日		妻方友人IV	○
9月7日		妻方友人III+V他2名	○
			○
			○
9月8日		夫の商売上の知り合い	●
			●
9月9日		夫の商売上の知り合い	●
9月10日		妻方友人I	○
		(食堂を開けたいという男性が夫に相談にやってくるが、玄関先で応対)	
(11日~14日、調査者アトシュA家長女の結婚式へ行き資料なし)			
9月15日		夫方友人	●
9月16日		妻方友人	○
9月17日		妻方友人I+II	○
			○
9月18日		夫方甥夫婦と2人の子	●
			◎
			◎
		妻方母親	○
9月21日		妻方友人V	○
		近所の主婦(引越し挨拶)	☆
9月22日		妻方友人I	○
9月23日		—	
9月24日		—	
9月25日		親戚男性2人	●
		(関係聞けず)	●
		親戚女性2人	○
9月26日		昨日宿泊した女性2人と	○

※ 34日間は調査者不在日を除く。
 ※ Z家妻方友人は5名の人物が頻りに訪れていたためその5名をI・II・III・IV・Vとして特別に記載している。
 ※ X家での分析に合わせ、子供夫婦の来訪は来客人数分析の対象外とした。

表6 Z家2月24日～3月31日の35日間における訪問客データ

日時	訪問客	食事をともにした訪問客	人別
2月24日		妻方友人V	○
2月25日		(夫妻メッカ帰りの友人宅へ、夫のみ帰宅し、妻友人III宅へ)	
2月26日		婚出娘と息子	○
			◎
2月27日		妻方従姉妹	○
		妻方祖母	○
2月28日		(妻マラルベンの夫の友人関係の葬式ベテへ)	
3月1日		妻方従兄弟夫妻	○
			●
3月2日		夫方友人	●
3月3日		工人	●
		夫方友人の妻	○
		夫方友人の妻	○
		その孫	◎
3月4日		—	
3月5日		夫方友人	●

	妻方友人II+III	○			◎
		○			◎
3月6日	婚出娘	○	3月18日	妻方友人Vと孫1人	○
	その娘	◎			◎
	妻方友人をもてなした宴席		3月19日	妻方兄嫁とその娘2人	○
	妻方友人II+III	○			○
		○			○
		○	3月20日	妻方友人IIの娘	○
		○		妻方友人I	○
		○	3月21日	(妻ベシクラム親戚宅に嫁探し)	
		○	3月22日	—	
		○	3月23日	夫方友人	●
		○	3月24日	—	
		○	3月25日	夫方友人の娘	○
		○	3月26日	—	
		○	3月27日	(娘の出産へ。夫、友人IIは帰宅するが妻は残って宿泊。)	
		○	3月28日	—	
		○	3月29日	夫の商売上の知人	●
		○			●
		○			●
		◎			●
		◎	3月30日	出産した婚出娘、新生児	○
		◎		婚出娘の夫、姑	◎
		◎			●
3月7日	—				○
3月8日	妻方友人I+II	○	3月31日	妻方友人I+1名	○
		○			○
3月9日	妻方友人I	○			○
3月10日	夫方友人	●			
3月12日	妻方従姉妹とその夫	○			
		●			
	妻方叔父の娘とその娘	○			
		○			
3月13日	—				
3月14日	妻方友人I+II	○			
		○			
3月15日	—				
3月16日	—				
3月17日	妻方友人Vとその娘と孫2人	○			
		○			

※ Z家妻方友人は5名の人物が頻繁に訪れていたためその5名をI・II・III・IV・Vとして特別に記載している。
 ※ X家での分析に合わせ、子供夫婦の来訪は来客人数分析の対象外とした。

訪問客凡例

- 夫方訪問客
- 妻方訪問客
- ◎ 夫方・妻方訪問客の子供
- ☆ 近所の人物(コシナと称される)

表7 Z家2月24日～3月31日におけるZ家妻の外出内容

月日	外出目的	妻方or夫方の用事	同行者	行き先	目的地までの距離	交通手段
2月25日	友人の帰国祝い	○	夫	家	市内	タクシー
2月26日	友人の帰国祝い	○	なし	家	市内	タクシー
2月27日	買い物(夫方友人宅訪問への準備)	●	夫	バザール	市内	徒歩
3月1日～3月3日1(2泊)	葬式の挨拶	●	なし	家	300km 遠方	遠距離バス
3月5日	招待状くばり	○	筆者	家	市内	タクシー
3月7日	葬式の挨拶	●	なし	家	10km 遠方	乗合タクシー
3月9日	買い物(夫方友人の妻へのつきそい)	●	夫方友人の妻	バザール	市内	徒歩
3月15日	買い物(夫方友人の妻へのつきそい)	●	夫方友人の妻	バザール	市内	徒歩
3月20日	葬式の挨拶	●	夫	家	5km 遠方	市内バス
3月21日	息子の嫁探し	◎	妻方友人	家	10km 遠方	乗合タクシー
3月25日	葬式の挨拶	○	次男	家	30km 遠方	遠距離バス
3月27日～3月30日(3泊)	出産祝い(婚出娘)	◎	夫・妻方友人 ※	家	30km 遠方	遠距離バス

記号凡例

- 妻方の用事
- 夫方の用事
- ◎ 子供の用事

Ⅲ 結論

1. 食べかたが示す人間関係の秩序

本論では「チャイ」と「タマック」という1日の食事構造があること、そしてそうした構成による食事が、ニスィウエという言葉に示される、家庭外の他者をも含めた食事の場をつくりだしていることを確認してきた。

本論で明らかになったのは、1点目に、「チャイ」と「タマック」の組み合わせによる食事の構成が、ウルムチだけでなくカシュガルにも共通してみられるということ、そしてナンを中心とした、自由に時間を設定できる食事が、ひとつの時間にとられるまとまった量として単位化されるのではなく、最初の1口（ナシタ）といった形で分節化されていることである。それは、ナンというムギ食品を中心とした食事行為の特徴として位置づけることができる。

そうした食事の構成と同時に、本論で明らかになったのは、こうした時間的な制限のない食品であるナン、そして大鍋の料理という食事の組み合わせによって、来訪者に必ず食事を提供すること、そして“見た”“聞いた”という方法によって食事のメンバーを決定しつつ、家庭外の他者とのあいだで食事を共有することが可能になっていることである。

ウイグル家庭における食事のメンバーは“見た”“聞いた”という契機によって決められる。この“見た”“聞いた”ことによって得られる取り分は“ニスィウエ”と呼ばれ、ウイグル家庭の食事を家庭内、家庭外という対比によって提供される食事とは異なるものとしている。それはこの取り分が“見る”機会を共有したという、家庭内・家庭外に関わらない食事メンバーの決めかたをしているからである。このことは、家庭空間のできごとが、家庭内の人物の行動を優先していないことを意味する。そしてそれは、ウイグル族の家庭が、家庭内の人物と家庭外の人物という対比からではない、それとは異なる空間秩序で律せられていることを示している。

さらに、この食事が、住居外の広場などといったひらかれた場における食事ではなく、家庭というひとつの限られた空間内の日常的な食事であることに重要な意味がある。家庭という限られた空間を、逆に居住者が優先的にふるまうことのできる空間ではないものとして位置づけることになるからである。

そこで重要になってくるのは、このような食事の場が、家庭にとってどのような人物を迎え入れているのかという点である。この問題に関して本論が示した解答は、家庭をおとずれ、食事のことを“見る”“聞く”機会を持つ人物が、妻方の親族・友人女性および、夫方の友人男性の妻たちといった、女性を中心とした人々であったということである。

本論は、ウイグル家庭で食事をともにする客が、妻の親族・友人によって多くを占められているということをも II. 2. において示した。客の来訪状況は、各家庭によって異なり、ある家庭では妻方親族の子供がほとんどを占め、またある家庭では妻方の友人がほとんどを占めるなどさまざまであり、妻方の関係が多いということ以上の傾向を引き出すことはできない。しかし夫方の客に注目するならば、夫方友人男性と夫の間の挨拶行為が妻たちによって代行されていることが確認された。ウイグル族のあいだでは、手土産をもった挨拶訪問が女性のみにもゆるされた行動となっている。このことを考えあわせるならば、家庭間の挨拶行為が、男性同士の関係であっても女性にとりもたれ成立している、という構造が浮かびあがる。ウイグル族のつきあいでは男女の区別が重要なものとして機能し、その結果、家庭という場において、つきあいが女同士のみで展開されているのである。

本論は、ウイグル族の家庭において、食べるということが示す人間関係のつながりを明らかにすることを目的としてきた。それについて本論が明らかにしてきたのは、ナンという食べ物を中心としたウイグル族の食事が、“見た”“聞いた”人物とのあいだで共有されているということ、その結果、家庭の食卓が、妻方、そして女性という関係を居住者とともに受け入れ、結びつける場として機能していたということである。

居住という範囲をこえたこの人間関係のひろがり、ウイグル族の社会のなりたちにおいてどのように機能しているのか。こうした点を明らかにするためには、今後、食卓からその周囲へと視点をひろげることが必要になっていくと思われる。住居空間はどのように使われているのか、もてなしではどのような会話がこなわれ、そこに女性のつながりと、男性とはどのように関係しているのか。このような方向からの研究を加えていくことによって、本論の結論は、より豊かなものになることが見込まれる。そしてそれは、家庭においてウイグル族の妻と女性が果たしている役割をより明確に示すことにつながるだろう。

参考文献

- 青山佐喜子 1998 「みそ汁のみその種類と具の組み合わせについて」『大阪女子学園短期大学紀要』42, pp. 31-40.
- 一番ヶ瀬康子・江澤郁子・田端光美 (編) 2002 『家政学概論』 ミネルヴァ書房.
- 石毛直道 1973 「食事文化研究の視野」『世界の食事文化』ドメス出版, pp. 5-16.
- 1991 「食卓文化論」石毛直道・井上忠司 (編) 『国立民族学博物館研究報告別冊——現代日本における家庭と食卓・銘々膳からチャブ台へ』国立民族学博物館, pp. 3-51.
- 1995 『食の文化地理』朝日新聞社.
- 石毛直道・井上如・柴田武・杉田浩一 1995 「座談会 フォーラムの成果と今後の展望」柴田武, 石毛直道 (編) 『食のことば』ドメス出版, pp.223-248.
- 石毛直道・吉田集而・赤阪賢・佐々木高明 1972 「伝統的食事文化の世界的分布」『世界の食事文化』石毛直道 (編) ドメス出版, pp.148-177.
- 井上忠司 1991 「食卓生活史の聞き取り調査」石毛直道・井上忠司 (編) 『国立民族学博物館研究報告別冊——現代日本における家庭と食卓・銘々膳からチャブ台へ』国立民族学博物館, pp. 55-81.
- 奥田隆子 1986 「若い女性の食生活について—短大卒業生と在学生の比較」『大阪女子学園短期大学紀要』30, pp.9-18.
- 梅本喜代子・難波敦子 1970 「家庭に於ける料理の形態と摂取食品材料について」『大阪女子学園短期大学紀要』14, pp.39-46.
- 熊谷瑞恵 2004 「ナンをめぐる中国新疆ウイグル族の食事文化」『文化人類学』69(1), pp.1-24.
- 小島麗逸 1998 「中国——漢民族による新疆の経済支配」『(21世紀の民族と国家 第3巻) イスラーム諸国の民主化と民族問題』未来社, pp.242-300.
- 小松かおり 1996 「食材料のセットと食事文化——カメルーン東南部移住村の事例より」『アフリカ研究』48, pp.63-78.
- 真田安 1992 「カシュガル」板垣雄三・後藤明 (編) 『事典イスラームの都市性』亜紀書房, pp. 551-552.

- 新免康・真田安・王建新 2002 『新疆ウイグルのバザールとマザール』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 田畑久夫 (ほか) 2001 『中国少数民族事典』 東京堂出版.
- 中根千枝 1970 『家族の構造——社会人類学的分析』 東京大学出版会.
- 馬場美智・深蔵紀子 1975 「家庭におけるメニュープランニングと一括購入について (その 1)」 『大阪女子学園短期大学紀要』 19, pp. 19-39.
- 1976 「家庭におけるメニュープランニングと一括購入について (その 2)」 『大阪女子学園短期大学紀要』 20, pp. 1-22.
- 藤田公仁子 2001 「漁業地域における食生活・食文化と生涯学習過程」 『生涯学習研究年報』 8, pp. 233-255.
- 松原正毅 1977 「トルコの村の食事体系」 『ヨーロッパの社会と文化』 会田雄次・梅棹忠夫 (編) 京都大学人文科学研究所, pp. 169-232.
- 柳本治美 1971 「シエルパ族の食事」 『季刊人類学』 2(4), pp. 172-234.
- 喀什地区行署办公室 (編) 2004a 『2004 年喀什地区统计年鉴』 (内部資料).
- 2004b 『喀什地区领导干部手册』 (内部資料).
- 廖泽余・马俊民 (編) 2000 『维汉词典』 新疆人民出版社.
- 劉萍 2004 『麻札阿勒迪村维吾尔人的亲属制度』 北京大学博士論文.
- 疏附县地方志编纂委员会 (編) 1999 『疏附县志』 乌鲁木齐: 新疆人民出版社.
- 新疆维吾尔自治区地方志编纂委员会 (編) 2002 『喀什市志』 新疆人民出版社.
- 新疆维吾尔自治区统计局 (編) 2004 『新疆统计年鉴』 (CD-ROM 版) 中国统计出版社.
- 颜其香 (編) 2001 『中国少数民族饮食文化荟萃』 商务印书馆国际有限公司.
- Abdukérim, R. 1996. *Uyghur-örp-adetliri* [Uighur's customs and habits]: shijiang-yashlar-ösmürler-neshriyati.
- Ekber, É(ed). 1999. *Uyghur tilining izahliq lughiti* [Uighur language annotatic dictionary]: Ürümchi: shijiang-xelq neshriyati.
- Muhammetimin, Q. 2003. Chaqmaq derya wadisidiki qedimiy makan [old time about the place along the lightning river]: *Munber* (65), pp. 65-84.
- Allison, A. 1997. "Japanese Mothers and Obentos" in Counihan. C ed., *Food and culture*, New York: Routledgem, pp. 296-314.
- Counihan, C. 1997. "Bread as World: Food Habits and Social Relation in Modernizing Sardinia" in Counihan. C ed., *Food and culture*, New York: Routledge, pp. 283-295.